た。保存期間では4℃以下の保存状態では3～6カ月でも力価の変化はなかった。

新生児期乾燥沪紙血での検討：検査総数2157名中、陽性者48名（2.2％）であり、呼び出しで、8名が来院した。母子ともにT_3、T_4、TSHを測定したが2名の母親が甲状腺機能亢進症であるのをみい出した。その後6名の経時的に母子の抗甲状腺抗体を乾燥沪紙血を用いて測定したが、子は2～4カ月で低下傾向を示したが母親は高力価を維持していた。

＜まとめ＞　乾燥沪紙血を用いた抗甲状腺抗体の測定は血清との関係も良好で満足できるものであった。新生児期乾燥沪紙血を用いてのスクリーニングでは2157名中48名が陽性を示し、呼び出しに応じた8名中2名は母親が甲状腺機能亢進症であることを発見した。

Turbidityを用いた高脂血症スクリーニング法の検討

大阪大学医学部小児科　藪内百治
野瀬宰
原田徳蔵

近年虚血性心疾患の頻度は増大しており、その原因としては高コレステロール血症が考えられ、それも萌芽は小児期に既に存在することが知られている。また小児期の比較的早期に高コレステロール血症を発見し、薬物、食餌療法を行うことにより、成人期における動脈硬化発症を有効に予防することも可能となる。今回LDLやVLDLなどリポ蛋白を沈澱させる比濁定量法を高コレステロール血症のスクリーニングに適当か否かを検した。

＜方法＞　血清コレステロールは酵素法を用い、HDL-コレステロールの分離にはヘパリン－Mn法を用いた。LDL、VLDLの定量にはBLF栄研キットを用いた。（LDL+VLDL）コレステロールは、総コレステロールからHDLコレステロールを差引いて計算した。

＜結果＞　総コレステロールと（LDL+VLDL）コレステロールの相関係数は0.8883で比較的良好な相関がみられる。総コレステロールと比濁法による（LDL+VLDL）は前者よりも相関係数は低く0.7351であった。（LDL+VLDL）コレステロールと比濁法による（LDL+VLDL）は相関係数0.9074と極めて良い相関を示し（図）、総コレステロールと（LDL+VLDL）コレステロールの相関よりも良好であった。一方免疫沈降法によるB-リポ蛋白と比濁法によるLDLは相関係数0.9497と良い相関を示した。

＜考察＞　今回用いたBLF栄研キットは操作が簡単で自動化も容易である。本法による（LDL+VLDL）の測定は（LDL+VLDL）コレステロールの値と極めてよく相関しており、方法として

簡便かつ信頼度が高い。また本法によるLDLは免疫沈降法によるB-リポ蛋白とよく相関している。したがって本法によるLDLまたはLDL＋VLDL の測定は高コレステロール血症の検査に極めて有用であると思われる。

＜結論＞ BLF栄研キットを用い、LDL、LDL＋VLDL の測定を行うことにより容易に高コレステロール血症を見出し得ることを示した。

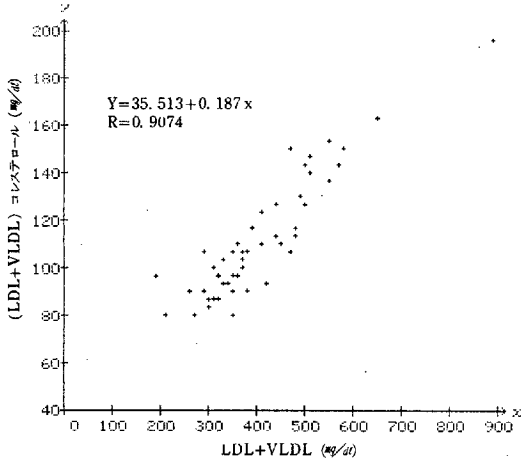

図 比濁法による（LDL+VLDL）と（LDL+VLDL）コレステロールの相関

先天代謝異常症スクリーニング研究班報告書

久留米大学小児科 山下文雄
研究協力者 芳野信
岡田象二郎
吉田一郎
安岡盟
坂口裕助

(I) マス・スクリーニング基礎データとしての低出生体重児の血液アミノ酸値の検討

＜目的＞ 低出生体重児は低哺乳量、肝未熟のため、血液アミノ酸値が成熟新生児とちがう可能性がある。血液沪紙を用い、個々の新生児を日令別にアミノ酸値を追及、スクリーニングの基礎資料とすること。

＜方法と結果＞ 高速アミノ酸分析計（日立８３５型）で４４新生児のPhe 、Leu 、Met 、His 、

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

近年虚血性心疾患の頻度は増大しており、その原因としては高コレステロール血症が考えられ、それも萌芽は小児期に既に存在することが知られている。また小児期の比較的早期に高コレステロール血症を発見し、葉物、食餌療法を行うことにより、成人期における動脈硬化発症を有効に予防することも可能となる。今回 LDL や VLDL などリポ蛋白を沈澱させる比濁定量法を高コレステロール血症のスクリーニングに適当か否かを検した。